

2022 9 18

「街の保健室 ～地域コミュニティの場～やさしい社会の実現」

私は、小学生の時、約2年間教室に入れなくなったことがあった。家にも入れない、教室にも入れない、それなら、行く場所は、学校の保健室しか無かった。最初は受け入れてもらっていた保健室も、段々と居辛くなっていった。過呼吸になっても、身体がきつても、受け入れてもらえなかった。誰もいない廊下や階段に座って時間が過ぎることを待つ毎日だった。とても孤独だった。「なんで私はここにいらんだらう。」自問自答、自死を考えた日々だった。そんな時は、相談できる場所や人、下で話せる場所、安心してたどる時間を過ごせる場所が欲しかった。大学の先生も話してあった。誰か一人信頼できる人がいれば、自死は防げる、と。

自死を考えた日々は、28歳頃まで続いた。中学、高校と辛い日々であった。大学では、やりたい学び、やりたい活動に参加して、たくさん経験を得ることができたが、その反面、精神的にも身体的にも負荷がかかり、エネルギーが切れてしまい、寝込む日々になりました。そして、「就職活動」、「働くこと」もできず、体調と向き合う日々。入院したい身体中、痛みやだるさ、精神的な不安定が、続いた。やっぱりそういう時々には欲しかったのは、居場所。話せる場所。聞いてもらえる場所。自分で動けずには、役所や病院などに「話せる場所、相談できる場所」を相談しても、たらい回りにされたり、相性の良い先生に出会えずまで、とても時間がかかった。

どんな人でも誰にでも年齢問わず、好きな時間に出入りできる。誰かが迎え入れてくれる。そんな温かい場所があるなら良いなと私は思っている。「街の保健室」だけにしておくと、困っている人しか入れないのかな？という印象を与えてしまうので、気軽に入れる、地域コミュニティの場として作りたい。そこは、カネもある。寝転がれるスペースもある。遊べる、本が読める、勉強ができる。保育士がいる、保健師がいる、看護師がいる、できれば心療内科もある。病気や障がいがある、一般枠では、なかなか働きづらの方の仕事スペースもある。たらい回し。就労継続支援A型やB型に促される働き方ができる場所。そこを訪れた働いている人は、利用料を払え、働くことが難しい人は、無料で入れて、お金が無くて食費もものに困っている人は、無料で食べれて。でも、「お金ができた時に、困っている人に使ってね。」と添えて。そこは、レクリエーションもできて、イベントもできて、知らない人たちを集めて、仲間ができて、「一人じゃないよ。」が広がっていく。

古民家をリノベーション、空間も大切にしたい。

実は、約3年前に21人規模の展示イベントを2人で主催したことがある。地域コミュニティスペースを一棟借りし、2階では、14人の作品の展示(絵やイラスト、筆文字、手紙細工、陶芸、ガラスのアクセサリー、バルーンアート等)、1階では、日替わりで飲食(定食、カレー、パン屋、おみずび屋、クッキーなどの焼菓子、コーヒーやサイダーの販売)を出店。企画、展示・出店者集め、連絡調整、説明会の開催、搬入、当日、搬出、打ち上げ、反省会...どれもこれも楽しくて仕方なかった。展示、出店者もお客さんも、とこもとも楽しそうだった。新作の仲間ができたという声も聞いた。3日間、空間が明るかたし、みんな笑顔顔を覚えていた。

毎日、このように明るい場所である必要はない。天気のように、様々の顔があってもいい。ある方が悪い。生きていくことが楽になる人が少なくなる方がいい。自殺する人、考える人が少なくなる方がいい。そういう人たちが、いなくなる方がいい。こんな場所を作ること、運営することが、私の夢だ。これからも、生きてから、働いてから、考えていこうと思う。